
転校生は、“元”魔王！？

沌弩羅♂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転校生は、“元”魔王！？

【Nコード】

N8700X

【作者名】

沌弩羅_♂

【あらすじ】

主人公の『萩元勇志』は、前世が魔王だった、『臼田怜生』と出逢い、さまざまなことに巻き込まれていく。そして、徐々に明らかになっていく勇志の過去とは…

第一話く出逢いく（前書き）

これを読む前に、『弱×2魔王様』を読んでくだされば、更に楽しんでいただけたと思います。

第一話　く　出逢い

俺の名前は、萩元勇志^{はぎもとゆうし}、高校二年だ。成績は中の上で、運動もそこそこだ。人気者^{にきもの}ってわけでもないが、いじめられてるってわけでもない。ぶつちやけ“フツー”だ。そんな俺が通ってるのは、楽羅伊^{がくらい}高校、でもみんな、楽羅伊^{がくらい}高校って呼んでる。俺もそう呼んでいる。

今日は、夏休み明け最初の学校、どこことなくみんなだるそうだ。後ろの席の斎藤が話しかけてきた。

「よう、勇志い。元気にしてたかあ？」

「おう！斎藤じゃん！久しぶり。元気だったよ。そっちは？」

「ぼちぼちだぜい。そいえば、今日、転入生が来るらしいよあ。く。」

「へい。そーなんだ。んで男、女？」

「一応、俺も男だ。女に興味がないって言えばうそになる。

「うわさじゃ男だって。ちよつと残念だよあ」

「だな。でもうわさって言えばさ……」

二人で話していたら、いつの間にか予鈴^{よれい}が鳴っていた。

「ほら、席につけ。朝のホームルームはじめっぞー！」

この人は、俺たちの担任、田坂^{たさか}。この先生は夏休み明けにかかわらず、年がら年中だるそな声をしている。

「えい、今日からこのクラスに転入生が入る。まだこの辺の雰囲気にもなれてねーと思うからみんな仲良くしてやれよ。ほい、入っ
ていいぞ」

「はい。」

「我の名は、臼田^{うすだれお}怜生。元は魔王だったが、色々あり今は、転生して人間をやっている。ちなみに今の姿では呪文はおるか空を飛ぶこ

「ともできん。これからよろしく。」

•

•

•

「よろしくな。」 「出身地とか教えてくれよ！」

あれ！？みんな反応薄くね？だって、“元”魔王とか急に言い出すんだぜ？なのに誰もそこについて突っ込まない。

「みんな、元魔王だからって仲間外れとかにすんなよ。」

「はい」

いや、おかしくでしょ~~~~!!!!!!!!!!

俺の、叫びで驚いた臼田は、こちらを向き「どうした？何をそんなにびっくりしているのだ？」って言われた。

「い、いや。なんでもないよ。それより一個質問してもいいか？おまえのその“元”魔王ってなんだ？なんかふざけた感じでもなさそうだし…できたら聞かせてくれないか？」

「よかろう。そなたに聞かせてやろう。とゆうか、そういったもの話すのがめんどくさいので回想にしよう。いくぞ……」

ポンポンポン ああああ

つて、回想でまとめてんじやねーよ……！

そんな俺の叫びも何の意味も持たずに、回想に入っていた……

第一話く出逢いく（後書き）

まだまだ初心者なので、読みにくいですがよろしくお願いします。
また、アドバイスなど、よろしくお願いします。

第二話〜回想〜（前書き）

『弱×2魔王様』に少しあらずじがつなりました。

第二話　回想

世界にはもともと、無界と天空界があった。

無界に、過去に創造神『ゼウス』の息子、『ゼギウス』の悪戯により創られた不完全の産物『人間』を生みだした。無界は人間界と名付けられた。初めのうちは、うまくやっていた。

しかし

『人間』は欲を持った。富、名声、地位を求めた。

そのために同種族同士で争った。

そして弱肉強食の世界が出来上がった。

『ゼウス』は『ゼギウス』を叱った。

そして、『ゼギウス』を天空界から追放した。

しかし、『ゼギウス』は人間とともに過ごすことを嫌った。

そこで新たな世界を生み出した。それが魔界だ。『ゼギウス』はそこで、王となり君臨した。

『ゼギウス』は人間界や、天空界から墮天したものを快く引き受け魔界の住人にした。

『ゼギウス』は魔王となった。皆が彼をあがめた。

彼は、名前を変えた。

名は、『セビラグ・デモイナレス』。

彼は、子を産んだ。

その子供の名は、『セビウス・デモナレウ』。

『セビラグ』は子が生まれた瞬間、死んだ。

『セビウス』は、『セビラグ』の家臣に育てられた。

「うわあああああああ!!!!!!」

「この山やばいつて!!!!!!死ぬ死ぬ死ぬううううう!!!!!!」

「やばいですやばいですやばいですつて!!!!!!」

二人は人喰い熊に追いかけられている。

しかも山に入ってから一週間も経っていない。もう丸三日も追いか
けられている。

「うおおおおお!!!!!!」

「あつ!魔王様!ま、前を見てくださいっ!!」

「えっ?あ~~~~谷に落ちるうううう~~~~」

「私はどこまででもついていきますぞ!」

こうして魔王たちは死んでしまった…

しかし彼らはもともと天空界の血をひくもの。

彼らにとって死ぬことは人間にとっての擦り傷や切り傷のようなもの。

転生だって自分の力であることができる。そこで、彼らは転生をしてまた魔族に帰ろうとした。

しかし、勇者との戦いや人喰い熊との戦闘で魔力が格段に落ちていた。

そのため人間になるしか手はなかった。

そこで二人は記憶を保持し転生をした。

ある約束をして…

「人間界でまた逢おう（逢いましょう）……」

第二話〜回想〜（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。

引き続きアドバイス等よろしく願いします。

次回は、また学校に戻ってくる予定です。（回想が終わって）

第三話　疑問　（前書き）

なんだか、いいサブタイトルが思いつきませんでした…

第三話　疑問

「…とまあそんなことがあったわけだ。そしてその転生した魔王、『セビウス』とは我のことだ。つまり我は、現在さまざまところを転々と周って探してるのだ。」

「ま、魔王様ですか・・・」

斎藤が突然立ち上がったかと思うと臼田のもとへ駆け寄った。

「つ、ついに見つけたぞ！（ぐすっ）かなり探してたんだぞ！も、なぜおれを探してくんなかったんだよ！こっちはとっても心配したんだぞ！」

どうやら一人称の『我』はキャラをつくっていたらしい。

「すみません、魔王様。実は私もパソコンを使いばちぼちと探していたのです。しかしとてもうれしかったです。」

「ああ。ありがとう。（ごほんっ）これで我の魔王だったという証明はできた。ほかに質問がある者はいるか？」

うあゝ、みんなめっちゃひいてる。やっぱみんな、半信半疑だったんだ。

「とくにないのなら、これで我の自己紹介を終わらせる。」

……

誰も話をしない。

先生も、「あ、ありがとな。じゃあ授業を始めるか。」

「……はーい……」「……」

クラスの全員（と言っても、病欠が二人、不登校が一人いるが…）が黙々と授業をした。

そして今日もすべての授業が終わりいつもどおり斎藤と帰ろうと思ったら、いつの間にかいなくなっており、臼田と何やら話しあっている。「魔王様、この世界には勇者、賢者、モンスター・ハンター魔物狩人が転生した姿

がいるはずです。そのような人はたいてい名前にヒントが隠されていたりします。たとえば、勇者だった場合『ヒーロー』や『元勇者』などのイメージの名前が入っています。」

「なるほど。では、まずこのクラス、学年、学校と広げていき、最終目標としては世界を探してすべてを見つけて八つ裂きにしてやるのだ――！」

「はい！一緒に頑張っていきましょう！ん？ところで、萩元くお前の名前って勇志だよな。フルネームで萩元勇志。萩“元勇”志だよな。まさかお前……いやありえないな。おまえがそんな悪い奴には見えないし」

「それに、本当に元勇者ならば、今頃理性を忘れ我に襲いかかると思うぞ。おい、そろそろ行くとするぞ。」

「はい。」

そして、放課後……

彼は、先ほど斎藤に言われたことについて少し心配していた。

……俺が、勇者！？

たしかにあいつに会ったとき、なんだか胸騒ぎがした、気がした。なんていうか、会ったことがないはずなのに見たことがある……

なんだか過去にあったような……前世で会った感じがした……

第三話ゝ疑問ゝ（後書き）

次の話は、賢者目線で、書かせていただきます。
また、次回は少し遅めに投稿させていただきます。

第四話ゝ発見ゝ（前書き）

やっと書きあげることができました！

第四話　発見

現在の時刻は午前1時4分

ここは、薄暗い一室。

中に、一人ポツンと座っている人がいる。

名前は『志野原賢』^{しのはらけん}。

彼は今一人でテレビゲームをやっている。

どうやらRPGをやっているようだ。完全にのめりこむかのよう
にプレイしている。

と、突然コントローラーをたたきつけ出した。どうやらボス戦で負
けてしまったらしい。

「くそっ！！なんなんだよ！！後、テメーはいつつも自分で旅に出
ずに負けたときだけ威張って『負けるな！復活に金かかるから。』

とか言いやがって！！」

どうやら王様に何かを言われたようだ。

「あゝもうやめたやめた。こんなやつやってられつか！くそっ！不
登校も楽じゃないな。」

彼はいじめられて不登校になったわけではない。『仲間』を探して
いるのだ。

彼は“元”賢者。呪文を主に使う、勇者パーティの一員だった。

しかし彼らは、人間。寿命が来たのだ。そこでみんなは離ればなれ
になった。

しかし、転生は奇跡でもない限り“基本的”には記憶の保持がで
きない。

しかし、彼は一流賢者。^{マスター・マジック} 超級呪文の記憶保持を使い記憶を残したま
まこの世界にやってきた。

ちなみに勇者、魔物狩人には上級呪文の記憶のヒントを残す^{スーパー・マジック}記憶默
示^{メモリヒント}を使った。

きつと彼らもいずれ自分の存在にきずいてくれるはずだ、彼はそう

願っていた。

勇者と魔王がすでに接触しているのも知らずに・・・

そして夜が明けた。

志野原は久しぶりに外に出た。週に一度の仲間探しだ。

彼はこの世界で、とても頭のいい人間になることができた。

そのため、自分の中に記憶している勇者らについての情報を入れてそれらをもとに、勇者らを探し出す、通称 ヒューマンリーダー 人間探知機 勇者・魔物狩人 ver をつくりあげ週一で探知をしているのだ。と、リーダーが突然反応した。

しかしこんなことは日常茶飯事だ。誤作動か人違いであろう。

しかし、念のため話しかけてみる。

「すみません。お名前お伺いしてもよろしいでしょうか。」

「ゆうしです。はぎもとゆうし。」

「漢字ではどのように書かれるのでしょうか。」

「ここが一番大事だ。名前に職業の名前の漢字が入ることが多いからだ。」

「草かんむりに秋で萩。元氣の元で元で、勇氣の勇に志すで萩元勇志。」

「元……勇……“元勇者”……」

「……あなた最近勇者って呼ばれたりしたことありませんか？」

「えっ……な、ないよ！それだけか？もう俺は帰るからな。」

そう言ってさっさと帰ってしまった。

……怪しいな。

ついに見つけたかもしれない。

志野原はそう思った……

第四話ゝ発見ゝ（後書き）

次回は、ついに勇者が誰なのか分かる！予定ですが…
魔物狩人も少しだけ出すかもです。

第五話、確定

俺が、勇者……ここまで言われ続けたらもう決まりだ。

そう思うと幾分か気が楽になった。と、突然頭が激痛に襲われた。

「くっ！グウアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

!!!!

ここは普通の道。周りの人が驚いてこちらを見ている。

しかし彼はそんなことも分らないくらいの痛みに襲われている。

「なぜ…突然こんな痛みに…」

すると人ごみの中から一人の男が現れた。

見た目は10代後半から20代前半な容姿。髪色は深紅。片目に包帯を巻いている。

「クッククッククック……
 ついに見つけたぜエ！元勇者セブクラーク

「ウ！今の名前は確か、
『櫻庭龍慈』だったなア！」

えっ？

「ち、違いますけど……」

「えっ……ああ……！！ほんとだ……！！人違いだった……！！いや、あい
つとそっくりなけはいがしてさ、ごめんごめん……！！じゃあね……！！」

何だったんだ……しかし今の男の言葉に一つだけ気になる言葉があった。

「元勇者セブンクラークウ！」

つまりは俺以外にも勇者がいるということだ。なんだか不思議な気分だ。

「ま、いいや。とりあえずかえろっ！」

そんな光景を啞然と見つめていた女がいたのはまた別の話。

勇志は家について電話をかけていた。斎藤だ。

「もしもし。俺だよ俺。」

「……ああ勇志か。俺俺言ってるから『おれおれ詐欺』かと思っただぜ。」

「違うよ。実はさ、今日変なことがあつてさ。」

「ん？変なこと？」

「うん。なんか、今日、突然変な男に名前を聞かれてさ。名乗ったわけよ。そしたらなんつったと思う？」

「……まさか、『……あなた最近勇者って呼ばれたりしたことありませんか？』じゃないのか？」

「なんで一字一句間違えずにあてちまうんだよ！」

「本当にそう言われたのか？」

「あ、ああそうだけど……」

「その男、変な機械を持ってなかったか？」

「よくわかったな。持ってたよ。丸っこい奴。」

「ついに見つけたぞ……志野原……私があればどれだけ探したことが……」

「どうした斎藤？」

「ん？いや、何でもない。ちょっと考え事をしていたんだ。じゃあ俺これから用事があるから一回切るぞ。」

「おう。じゃあな。」

「じゃあ」

斎藤はさっそく臼田怜生に電話をした。

「もしもし、魔王様ですか？」

「おう。斎藤か。どうした？」
「ついに元賢者現在の名前を志野原賢。彼を見つけました。」
「何だと！！！！ついに見つけたか！！！！よくやった。」
「ありがとうございます。ところで彼をどうしましょう。」
「八つ裂きにしてやりたいところだが、今はダメだ。」
「なぜですか？ひと思いにやってしまえばいいじゃないですか。」
「今のおれにそこまでの力も魔力もないし、第一この世界でそんなことやったら即逮捕！に、なっちゃうよ。」
「それもそうですね。では明日、学校で決めましょう。」
「そうだな。じゃあお休み。」
「お休みなさいませ。」

そして次の日の学校で…

第五話ゝ確定ゝ（後書き）

勇者が誰だかは判明しました！

次話で久しぶりに学校で話を展開させます。

今回は会話文が多くなってしまいました。すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8700x/>

転校生は、“元”魔王！？

2011年11月10日12時30分発行